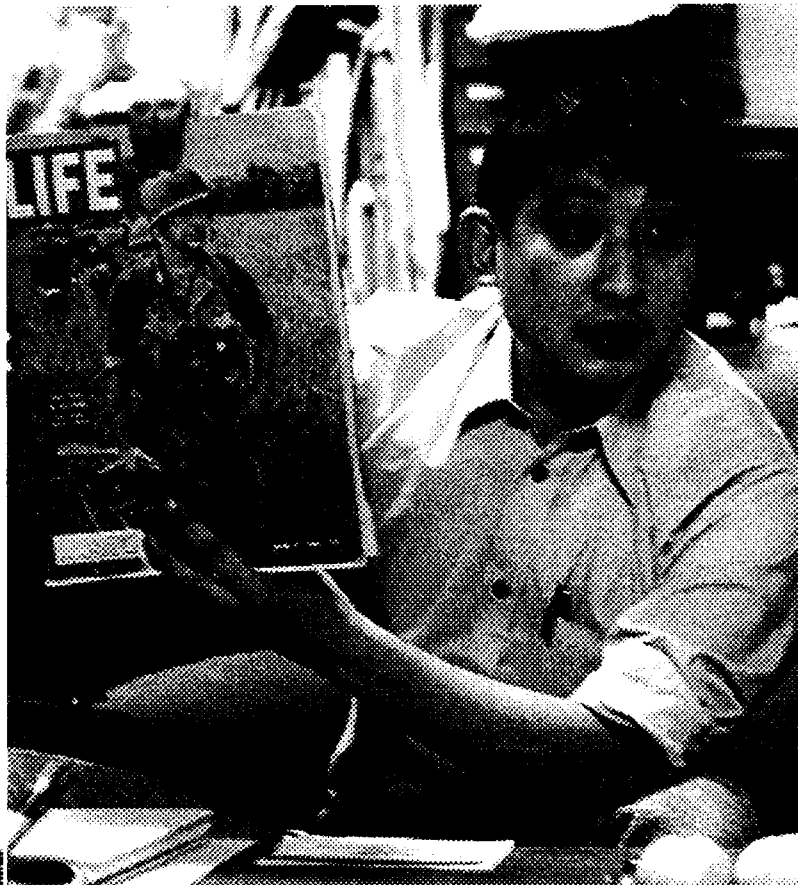


1997.5

岡村昭彦の会

NO.6

シャッター以前の思想が問われているんだよ。
報道写真の基本は歴史のジャッジに耐えうる証拠力の強いものでなくちゃ。



〈第12回AKIHIKO忌講演会報告〉

——再評価の視点——

60年代ジャーナリズム

「ニュージャーナリズムと岡村昭彦」
「世界史の『未来の壺』を開きに」

1997年3月23日 於 日本出版クラブ会館 参加者61名

玉木 明
吉田敏浩



父は怒っているのかも……。



“AKIHIKOの弟”の役割はそろそろ……



今回も両

世界史の「未来の壺」を開きに

吉田敏浩



一二回目のAKH-HKO忌で講演をさせていただくことに感謝します。

今日は、私がフリーのジャーナリストとして、主にタイ、ビルマ、アフガニスタンといった国々において、少数民族といわれる人たちの民族運動・自治権の運動、山岳地帯の諸民族の生活・文化などを取材してきた経験を通して、同時にまた岡村昭彦の仕事・足跡、問題意識や方法論、そういうものから学んだことを含めて、岡村さんの思想を、私はこういうふうに加え、こう捉えているということをお話したいと思えます。

岡村さんが亡くなって二年たちました。若いジャーナリストの中には、岡村さん知らない人

もいます。非常に不勉強です。知っていても、「もうあの人は過去の人だ」と見る人もかなりいます。しかし私は、岡村さんの歩みから学ぶべき点が多いと考えております。折にふれて会う人にそう強調しています。

岡村さんの世界観・問題意識・方法論というものを考えるとき、その独自性、先駆性という点にまず目をひかれます。岡村さんはベトナム戦争の取材から始まって、アイルランド、ピアフラ、それから晩年はバイオエシックス、ホスピスといったテーマを持つ、フリーランスとしての歩みをしました。

最近、癌患者の末期医療をめくって、死に行く

人をいかに看取るかという側面でホスピス、バイオエシックスが非常に注目されています。ところが、『ホスピスへの遠い道』という本に代表される、八〇年代前半に岡村さんがおこなった先駆的な仕事が見みられていないし、触れられることがほとんどありません。これはまことに残念なことです。

岡村さんは単にホスピスを、癌患者の末期医療だけの問題としてではなく、イギリスの植民地支配下のアイルランドで始まった人権運動としての近代ホスピスの源にまでさかのぼって、事実を検証し、取材して記録を残しています。

岡村昭彦なら現在のさまざま問題について、どう思い、どんな発言をするんだろうか」といつも考えます。たとえば遺伝子操作という問題についても、最近クローン羊が話題になり、その技術を生かせばクローン人間も可能だというような報道がセンセーショナルにおこなわれていますが、岡村さんもDNA・遺伝子操作・生命操作というテーマで八〇年代初めから、取材し、文章を書いています。

そんなニュースに出合う度に、「岡村昭彦が、今生きていたらどう言っか」と想像し、彼が残した作品を通して、その思想をどう学ぶか、どう掘り下げていくのかということを考えるのです。

私と岡村さんとの出会いは、一度だけです。一九八二年、NHKの「若い広場」という番組で、

戦争報道写真についての座談会があったときです。そのとき、岡村さんから、フリーランスのジャーナリストにとつての、シャッター以前の独自の視点・世界観の大切さというものを聞かされました。一期一会、一度だけの出会いでした。

私が八五年から八八年にかけて四年近く、北ピルマのカチン州、シャン州の山岳地帯に住んでいる諸民族を訪ねていつている間に亡くなられたということを知りました。非常に悲しく、あらためて岡村さんの本、『南ヴェトナム戦争従軍記』正・続と『兄貴として伝えたいこと』をはじめ、著作集を読みました。

私自身、現場で取材していて、ある事実と接したときに、「岡村昭彦ならこれをどう捉えるだろうか」と自らに問い続けてきたわけです。

岡村さんのフリーのジャーナリストとしての独自の歩みを、私なりに考え、『シャッター以前』(岡村昭彦の会葬発行)に「世界史のしっぽと戦略村」という文章を発表しました。

岡村さんがベトナム戦争報道のあとアイルランドに行き、世界史の複雑さを自覚して、そこから、その中にあるさまざまなものを掘り下げて、自分の仕事を大きな歴史の流れの中のひとつの証言として位置付けていつていることに感発されたからです。岡村さんに会ったときにも直接そういつたことを聞き、自分がいかに無知であったかということを感じました経験もあります。

岡村さんに会つてから、たとえばピルマでいいますと、イギリスの植民地支配の歴史がピルマの民族問題にどんな影響・傷跡を残しているのか、というようなことを調べるようになりました。イギリスがアイルランドでおこなった土地収奪の方法(勝手に規則や法律をつくつて土地を囲い込み、住民を強制移住させる)、つまり植民地支配のひな型、原型をつくつて、それをその後、インドとかマレーシア、ピルマなどで生かしていつたという、歴史の根っこ部分を岡村さんに聞かされていたことが、自分で調べていく手がかりになったわけです。

イギリスが植民地支配の下で、アイルランド人をカリブ海の西インド諸島に強制的に連れていき、労働させ、その後、黒人を奴隷にしてアフリカから西インド諸島に連れていつて、砂糖キビやタバコの栽培に従事させた。そしてその裏を自国に持ち帰り、資本の蓄積をおこなつて、産業革命を生み出していつた。つまり、三角貿易といわれる、世界史のしっぽであり、恥部である例のひとつですが、岡村さんはこのような奴隷制と資本主義の発達史を知り、人間が人間を差別し、搾取し、支配してきた歴史といつたものを、しっかりと踏まえていくことの重要さを語っていました。それが「世界史のしっぽ」といふ言葉に端的にあらわれているんです。

ピルマで、戦略村を(これは岡村さんも本の中

で触れている)目撃しました。反政府ゲリラを支援する住民とゲリラ組織の連絡・協力関係を断ちきることによつて、ゲリラを鎮圧するという作戦のひとつとして戦略村がつくられるのですが、そのためには一定の地域に住んでいる住民を強制的に村から追い立てて、自動車道路のそばに新しい村をつくらせるんです。強制収容所みたいなものです。政府軍部隊がそのそばに陣地を築いて、常に監視しています。

北ピルマのシャン州、カチン州に取材にいつたときに、家を焼かれ、村を追われて、逃げ出してきた難民(国内難民)の人たちの話を聞きました。そしてこついつた組織的な戦略村、強制移住作戦、強制収容作戦という、非人道的な支配の方法をいつたい誰が、いつ頃、どのようにして考えたかどうか、と疑問に思つたわけです。

確か、岡村さんの『南ヴェトナム戦争従軍記』の中の、ベトナムの山岳民族を、南ベトナム政府とアメリカ軍が一緒になつて、戦略村に困い込んで、解放民族戦線との関係を断ちきろうとしたという記述を思い出し、日本に帰つて、岡村さんの本から出発して、いろんな文献を調べていつたんです。

そうしたら、ベトナム戦争でアメリカ軍がおこなう前に、フランス軍が一九五〇年代にベトナム独立運動を弾圧するために、この戦略村という、住民の強制収容作戦をおこなっていることがわか

りました。その前にはイギリスが、いまのマレーシア、昔のイギリス領マラヤで、マラヤ共産党という、中国系住民を中心にした組織を壊滅させるために、中国系住民と山岳民族を平地の戦略村に入れる作戦を実行していました。

さらに調べてみると、日本軍も旧満州や中国の北部で、抗日運動を弾圧するために、住民を追い立てて、戦略村に囲い込んで、無人地帯をつくるということをしていました。その前には、中国の国民党が中国共産党を弾圧するために同じことをやっているんですね。

さらにイギリスが二〇世紀の初め、南アフリカにおけるボーア戦争のときにも、オランダ系移民の強制移住作戦をおこなっているわけです。

もっとさかのぼると、清教徒革命を起こしたイギリスのクロムウェルが、アイルランドを征服した時に、アイルランド人を強制移住させ、荒れ地の一面に住民を囲い込み、無人地帯となつた所をイギリス本土やスコットランドの貴族の領地にしていくということがおこなわれていたんです。一六五二、三年のことです。クロムウェルといえば、日本では世界史の教科書などで、偉人みたいに扱われている人ですが。

「歴史はある日突然に始まりはしない」。常に岡村さんはそう言っていました。「人間の歴史を本当に理解しようとするには、一三百年も三百年も過去にさかのぼり、歴史の結び目と結び目をして

かりとたしかめ、自分の力で原因と結果を明らかにしてこそ、はじめて歴史から学んだと言える。『われわれはどんな時代に生きているのか』と。

確かに、イギリスがアイルランドで戦略村・強制移住作戦の原型をつくったわけです。それが世界各国の軍人、官僚、政治家たちに、負の遺産（マイナスの遺産）のひとつとして継承されてきたのです。たとえば東南アジアの軍人は、イギリスとかアメリカの学校で将校教育をうけたりします。対ゲリラ戦の鎮圧方法の教科書を、イギリス人やアメリカ人が何冊もつくっているし、方法論が脈々と受け継がれています。

最近も、タイ・ビルマ国境に近いところで、ビルマ軍によってカレン人、カレン人といった民族の人々がやはり村を追われて強制収容されています。あるいは、戦略村に収容されると自由がないから、難民としてタイに流入しています。同じようなことは、たとえばインドネシアの東チモールでもおこなわれていますし、世界各地でいままなおこなわれているんですね。これを歴史の暗い地下水脈と呼んでもいいでしょう。

「資料というのは常に権力側が持っている」。岡村さんはそう言っていました。このような負の遺産というものをしっかり踏まえて歴史を見なければいけないということだと思えます。

戦略村はその一例で、奴隷制、巨大開発、核兵器、枯れ葉作戦など、多くの負の遺産が世界史に

はあるわけです。岡村さんはそういうものを見つめながら、その事実を歴史の証言として記録していったわけなんです。

人間というものは永遠にこの負の遺産に、からめとられ続けていくのでしょうか。そうした面もあるかもしれませんが、そうではない、人間の命の大切さを、人間を支配の対象や道具や歯車にしないような社会のあり方を、常に岡村さんはめざしていたと思います。そんな新しい思想、新しい人間社会のあり方をつくりだそうと試みていたんじゃないでしょうか。

民族問題にしても、昨日まで支配される側であった少数民族が独立すると、旧ユーゴスラビアの例なんかもそうですが、独立した新しいテリトリーの中でまた少数民族が生まれて、昨日までは被抑圧側の民族が、今日は抑圧する側に回るといようなことは、たくさん見られます。

岡村さんがベトナムからアイルランドに行ったきっかけは、ベトナム戦争にアメリカが介入する決定を下したケネディ大統領の先祖が、アイルランドからの移民だったからです。

そのアイルランド人が植民地ではイギリスの支配下におかれていたのに、アメリカに移住したあとは、黒人とか、ほかのマイノリティーと角逐しながらの上がってゆき、そしてケネディという、アメリカの権力の頂点をきわめる人間をそこから出していったところに、岡村さんは注目しました。

そのケネディが、南ベトナムを共産主義の脅威から守るという政策の名のもと、軍隊を派遣し、その後ジョンソン大統領が引き継ぎますが、アメリカの軍事顧問とかグリーン・ペレー（特殊部隊）を送って介入していったのです。

特殊部隊というのも、アメリカ軍がベトナムの山岳民族を特殊部隊の現地部隊員として採用し、軍事訓練を施して、解放民族戦線にぶつけるという、民族間の、少数者と多数者の間にある、差別や反目を利用しておこなった作戦です。

この特殊部隊も、イギリス軍がネパールの山岳民族を同じように利用したグルカ兵という原型があつて、世界中のイギリスの植民地支配において、独立運動などを弾圧するために使われた歴史があります。グルカ兵は特殊部隊のルーツなんです。被抑圧者が抑圧者に転じるといった、アイルランド移民とケネディ大統領の歴史を知ることによつて、人間の歴史の複雑さを岡村さんは実感していったのでしょう。

一九六八年の一月一日に、岡村さんは初めてアイルランドの地を踏みました。その年の後半からは、西アフリカのナイジェリアの地域で、イボ族という少数民族がナイジェリアから独立しようとするビアフラ独立戦争を、取材します。ナイジェリア政府は独立運動を弾圧しました。独立運動が起きた地域にはイギリスが開発した石油の油田地帯があつたので、イギリスはナイジェリア政府

を支援しました。岡村さんはその取材で、六八年、六九年と訪れているんですね。

そのときのことを書いた「独自の世界観を未来の壺に——ナイジェリア内戦の取材体験から——」という『新聞研究』（一九七八年九月発行）に載せた文章を図書館で見つけました（著作集の中には入っていません）。

そこに、岡村さんがナイジェリアの首都のラゴスに行つて、政府軍の記者会見に出たときのこと書かれています。ナイジェリアの指導者であるゴーン将軍が、ビアフラ独立を鎮圧し、国内を再統一する問題について、アメリカもアメリカの内戦、つまり南北戦争を経た後、やっとUnited States of Africaになつたではないかと語ります。ゴーン将軍は、ナイジェリアのリンカーンに自分はある、という決意を示したのです。

しかし、リンカーンと言われたときに、岡村さんは、日本で出たリンカーンの伝記というのは偉人として扱っているだけで、さまざま政治の手段や権を駆使した政治家としての生きたリンカーン像が描かれていないことに気づきました。そして、「リンカーンを窓口とし、未知の世界史の壺に深く手を差し入れることになつた私は」と、岡村さんは書いています。「遠く西アフリカの奴隷売買時代にまで時代をさかのぼりながら、ナイジェリアという一八八五年のベルリン会議の結果、ヨーロッパの列強国によつて分割誕生した

国家の生い立ちまでまきぐるることが出来るようになった」と。

岡村さんは世界史についての本を常に現場に持つていきました。このビアフラ取材のときも『西アフリカの歴史』などを現場に持つていって読んでいます。そして「国際ニュースを専門とするフリーランスの報道写真家として独自の地位を確立するには、まず世界史の頭がどこで、尻尾がどちらを向いており、どの部分が恥部かを知り、独自の世界観を持つていなければならぬ」と記しています。そういう歴史問題のルーツへとさかのぼつてゆきつつ、さらに別の要素がどうからみ合っているのかという視点をつちかっています。

歴史の中で支配されてきた、傷を負ってきた人たち、少数者、たとえば植民地下の人たちへの強い共感というものを持つていて、そこを軸として世界史を見ていく。そういう岡村さんの軸をつくるのに、ベトナムからアイルランドへの、そして西アフリカへの歩みが大きな影響を与えていると思います。

岡村さんは「人間はどこから来て、どこへ行くのか」と考えていました。「それぞれ独自の世界観を持ったフリーランスが、仕事を積み上げていって、その積み上げの上に二二世紀の人類の未来を見通そうという試みがなされるべきだ」と岡村さんは語っています。

それは「世界史の壺の中から未来の壺を見いだ

す「こと」につながると思います。これは、岡村さんの言葉に私がさらに解釈を加えて言っているわけなんです。暗い歴史の地下水脈を断ちきり、いつか生みだされるかもしれない、生命のたいせつさに根幹を握えた新しい思想・精神・人間社会のあり方を象徴する言葉が、「未来の書」です。ただ岡村さんが、人間の歴史を、簡単に図式的に、支配对被支配とか、抑圧对被抑圧と捉えていたのではないことは当然です。

岡村さんは人間の歴史の複雑さを踏まえながら、生命の大切さというものを常に意識していたと思っんです。ですから、ベトナム、アイルランド、ビアフラを経て、戦争や民族紛争の現場からの報道とは別のテーマを模索しているときに、バイオエシックスというものと出合ったわけです。

そのバイオエシックス（生命倫理）、これは木村利人さんという、日本のバイオエシックス研究の先駆者である方と、ベトナム時代からの友人でしたので、その人との出会いがもちろんきっかけになったでしょう。そして、バイオエシックスを経てホスピスといった流れの中で、新しい生命の思想、人間社会のあり方の可能性の芽を岡村さんは見いだしていったようです。

岡村さんは一九六三年、南ベトナムの首都サイゴンにいたとき、アメリカの写真週刊誌『LIFE』のDNAの二重螺旋構造についてフォト・エッセイを読み、その後、枯れ葉作戦の実態も目撃

します。その体験というのが、おそらく岡村さんの記憶の中に根を下ろしていて、それがバイオエシックスやホスピスといったものと出合ったときに、岡村さんの中で独自のつながり方をしていたのだと思います。

岡村さんは、戦場という、人間の生と死がどっちにどう転ぶかわからない現場を、報道の原点としていたので、人間の生とか、死とかというものへの鋭敏な感覚を持っていたはずで、と同時に、戦場では、人間の肉体が傷つくだけではなく、人間の心も傷ついていくという点も重視していました。

シエル・ショックという言葉があります。砲弾が降りそそぐ塹壕の中にもっている兵士が、精神に変調を来すことをいいますが、ビアフラの黒人兵にはシエル・ショックを起こした人がかなりいたと言っていました。「そういう兵士をビルマでは見なかったかい」と聞かれました。「ビルマではまだ見ていません」と答えると、「戦場では肉体だけの破壊ではなくて、心の破壊というものもおこなわれているんだから」と言われました。この言葉も私の心に刻まれています。そういうものを含めて、世界史の負の遺産を直視して記録する中から、新しい思想を生みだす試みをしていったのだと思います。

いま日本でホスピスというと、癌末期患者の看取りだけに限定されているようですが、そもそも

困難した巡礼者へのひとつのケア、助けをするという中世ヨーロッパでの修道院の伝統にルーツがあるわけです。また、近代のホスピスは、イギリスの植民地支配下のアイルランドで土地を失い、都市に流入し、貧困と病気に苦しむアイルランド人やイギリス人のケアを、マザー・メアリー・エイクンヘッドという、近代ホスピスの母と呼ばれる人が中心となって一八七九年につくりだしていたのです。ホームとして「困難した人たちがここで最後を迎えるため、人間らしく世話をうけられる家庭としての、安息の場を提供し続けた」という、近代ホスピスの原型を岡村さんはさかのぼって調べているわけですね。ホスピスは癌の末期患者を看取るだけが目的ではなかったのです。

たとえば、そうした人権運動としてのホスピスを、人間が生みだしたひとつの、負の遺産に対する正の遺産と考えたとき、その根底には自然に根ざした生命のリズム、あらゆる生命がそこから恵みを受けている命の土壌が自然と世界の中にはあり、岡村さんは、それを重視する目を持っていたのではないのでしょうか。

『ホスピスへの遠い道』に、岡村さんが晩年住んでいた舞阪の家の近くの浜名湖の漁の様子が記されています。季節の巡りにしたがって、カキやサヨリ、シラス、ノリといったものが、どんなリズムで育ってきて、それをそこに住んでいる人たちにとって、糧として命をはぐくんできたかとい

うことが書かれています。自然のリズムの大切さを、岡村さんはきつちり感じて認識していたと思います。

岡村さんが『LIFE』の契約フォト・グラフィアになったときに、ニューヨークで先輩のカメラマンである、DNAのモデルを撮影した人から「戦争だけではなく、ライフ、生命に関しての全てのことをカバーするのが『LIFE』のカメラマンなんだ」というようなことを言われたそうです。岡村さんのそういうった思想を、私も常に現場で考えさせられました。

たとえば北ヒルマのカチン人のゲリラ部隊に行取材していたとき、ある家で一休みしたら、そこのお婆さんが、突然震えだして、忘我状態になり、ガタガタ震えて止まらなくなりました。その息子が言うには、ヒルマ政府軍に家を焼かれたのを目の前で見ていたから、軍服姿を見ると震えが止まらなくなるんだということでした。息子は母の心の傷が癒えるために祈っていました。

また、ビルマ政府軍の攻撃で、ある村の村人たちが難民となって中国領に出てゆく前の夜のことでした。山岳民族のお婆さんが、干したトウモロコシの粒を一生懸命手でしごき取って、竹かごにたくさんためていく姿を見ました。明日はどうせこの村を去らなければいけない、いつ帰れるかわからない、そういう厳しい状況の中で、あたたかも毎日、明日また食べる分を取っているというよ

うに、ごく自然な、怯えも見えないし、慌てているふうにも見えない、そういう姿を見ました。

そのとき、そこに生きている人たちが、焼畑でとれたトウモロコシ、作物を命に必要なだけ生産して食べて、また次の年の種にするという、その営みの歴史の中に生きてきた人たちが持っている、自然と人間のつながりのリズムは、たとえば軍隊とか、あるいは国家といった制度の力によっても奪うことができないんだ、そういうものが脈々と歴史の底の方に流れているんだということ、私は実感しました。

岡村さんは、生命のリズムとホスピスの歴史を重ね合わせて、新しい思想の火種を伝えていこうと、心を配っていたと思います。その伝達の方法も、マスコミを通じてではなくて、看護婦たちとのゼミとか、精神病棟でのボランティア活動とか、さまざまな勉強会を通して、独自の伝達の方法をつくってききました。

負の遺産もあり、正の遺産もあり、それらが混沌としている世界史の壺、その中から生命の大切さを、十分に生かしきる新しい思想を生みだす未来の壺。たとえば、ホスピスやバイオエシックスなどがそこから生みだされると思うんです。そういう新しい思想、精神というものが、世界史の未来の壺の中で、発酵していく、熟成していつかという視点に立つと、熟成させる歴史の作業のひとつを、岡村さんもやっていたんだなというか

うに思われます。

アイルランドでは、イギリスの植民地支配下で祖先たちがどう生き続けてきたかという歴史が、裏切りとかも含めて伝えられています。『Six of the Doves』という本で、六世代を通して伝えられるいくものとして学校でも学ぶし、それぞれの家庭でも伝えられてきているんだということ、岡村さんは語っていました。簡単に新しい思想、精神が生まれるとは考えていなかったのです。

NHKの訪問インタビュウの中でも語られていましたが、浜名湖の周辺に、屎尿処理施設をつくるのに漁民たちが反対運動をしたときに、岡村さんも参加したんです。岡村さんは、巨大ダムが開発されることによって川が生態系が、歪められていくのを、TVAの歴史をさかのぼりながら、この時期に研究しています。そして、裁判も含めて権力側に対し、民衆の側がいろんな異議申し立てをしても、多くは負けてきた例の方が多いことを語っています。ただ、同じ負けるのでも次に芽が出るような負け方をすべきだということを強調しています。

簡単に新しい生命の思想が生まれるとは、岡村さんも思ってなかったんですね。それにいたる過程、プロセスに全力をかける。そこに岡村さんの真骨頂といえますか、本領があつたんだと思うんです。後に続く人たちがいろんな失敗も含めて、歴史の事実を伝えていくことを重視していまし

た。「アフロラやアイルランドに行ったとき、いかに自分が世界史に無知であったか、知らなかったかというマイナス面も含めて伝達して」、新しい生命の思想の火種を伝えていきたい、そういうことを岡村さんはめざしていたと思います。

現在も、岡村さんの世界観と問題意識と思想の火種から学ぶ点は本当に多いわけです。ダムの問題にしても、遺伝子操作にしても、マスメディア批判、記者クラブ批判の問題も含めて、やはりそこにあるのはフリーランスとしての自覚が大きいんでしょう。ひと擲りの専門家にジャッジをゆだねるのではなくて、自分たちの命は自分たちで守るという、民衆が意思決定、政策の決定にも参加するということ、そこを岡村さんが強調していたわけなんです。

私も、岡村さんに学びながら、ビルマやアフガニスタンで、民族問題の取材をしていていろんなことを考えさせられました。多数派と少数派の対立があり、政府軍が村を焼いたり、政府軍に内通していたという理由で、スパイだと思なされた村人がゲリラに処刑されたりします。そうした憎しみの連鎖といますか、最初のボタンの掛け違いがどんどん、憎しみと、怒りと、暴力の連鎖を生んでゆくということが、紛争地や占領地の現場にはあるんです。

そういうときに、そこに生きている人たちには自分たちと同じように家族がいて、地域社会の中

で生きているんだ、同じ人間としての喜怒哀楽もある、と誰もが思えるなら救いはあるんです。そういう他者への共感、感受性、想像力があれば、虐殺とか強制収容・連行といったものは、なかなか起きないはずなんです。

しかし現実はずうではなく、たくさん起きています。それをなくして、問題を解決するのは本当に難しいんです。ひとつには、民主主義や人権といった制度面からのアプローチが重要ですが、そしてまた、どちらの側も人間として、同じ一回だけの命、この地上に生まれて死んでいく、一回きりのそれぞれの命を持ち合っていて、その命のつながりの中で生きている、その命をばぐくんでいる自然、土壌、そういうリズムを共有している、共に分かち合っているんだという思いを、共に持つことも重要です。異文化理解、他者への理解、異質な者同士がどのように共存していくのかという問題の根底には、生命のつながりというものがあると思うんです。

それらのことを、私自身も現場での実感を通して感じますし、岡村さんのベトナム戦争報道からホスピスまでの歩みをつらぬいているもののひとつとして、それがあってはならないでしょうか。岡村さんの仕事は、私たちフリーランスのジャーナリストにとって、さまざまなかたちで、どう判断すればよいかとか、どのように問題を掘り下げていけばいいかという時の羅針盤になっているように

思います。岡村さんの仕事が今後、必ず再評価される時代がくるでしょう。

岡村さん自りも、熟成を試みる作業に加わった『世界史の未来の巻』。それがどのように、いつ開かれるか、実はもう開かれつつあるのかもしれないし、それはわからないんですが、「未来の巻」を開きにくくという人間の歩み、道筋を岡村さんは描いて、自からも開きにゆく途中で倒れたように思えるんです。

そして、「未来の巻」への道程、プロセスをその後もいろんな人が歩むことをきつと呼びかけていたにちがひありません。

よしだとしひろ（フリージャーナリスト）

一九五七年、大分県生まれ。明治大学文学部卒業後、フリーのジャーナリストに。ビルマ、タイ、インド、アフガニスタンなど、アジアの多様な民族世界を訪ねる。八五年から八八年、北ビルマのカチン州とシヤン州へ長期取材。その記録をまとめた『森の回廊』（NHK出版）で、第二十七回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。共著に『アジア大連帯図鑑』（現代書館）など。

ニュー・ジャーナリズムと岡村昭彦

玉木 明



実は岡村さんとは、生前何の面識もありませんでした。彼の書いた文章を読んで、そこから私なりの岡村昭彦のイメージを抽出して、今日お話ししたいと思います。生前交渉があった方のイメージとは、ぶれている面があるかと思います。その意味でレジメではカタカナで「アキヒコ」Vとしております。私なりの岡村昭彦像をカタカナの「アキヒコ」Vとして話を進めます。

話のポイントを『南ヴェトナム戦争従軍記』の成立過程、その位相、そこに絞ってお話します。これは非常に魅力的な素晴らしい作品で、ジャーナリズム全体から見ても、かなり主要な作品として位置づけられるのではないか思っております。ニュー・ジャーナリズムを論じる時に、私はア

メリカのハルバースタムを大変重要視し、ピッグ・ネームとして扱っていますが、アキヒコをそれに匹敵する、世界に出して恥ずかしくない、堂々たるジャーナリスト、肩を並べることが出来る日本人ジャーナリストと評価できると思っております。ハルバースタムとアキヒコは時期的にサイゴンで一緒の時があるんです。だから多分面識はあったらうし、ジャーナリストが集まるサロンがあったわけですから、話もしたかもしれないし、酒も飲んだかもしれないが、それは確認できません。二人の書いたものを読んでみても、どちらにも名前が出てこない。「この二人に交友関係があったんではなからうか」というのが私の推測です。サイゴン時代の話を書いたハルバースタムの

『ベトナムの泥沼から』という作品と、アキヒコの『南ヴェトナム戦争従軍記』は、同じ一九六五年に出版されています。仏印時代にベトナムに関わった、グレーム・グリーンというイギリスの作家が、ハルバースタムの『泥沼から』について、ベトナムに関する著作の中で「強烈に、魅力的で、畏敬的な、真に重要な著作」と評価し、絶賛しています。読んで見ると、これは決して大袈裟な賛辞ではなくて、まさにその通りの作品だと私も思います。私自身も、何度も目を通し、この作品をベトナム戦争の重要な著作物であり、しかもニュー・ジャーナリズムの出発点にある、非常に大きな作品であろうと評価していましたが、これにアキヒコの『従軍記』を並べても、決して見劣りしない。これは凄いことです。ぜひ並べて読んでみて、比べていただきたいと思えます。この二つの著作というのはどちらも互いに遜色ありません。しかも両方とも堂々とした、ベトナム戦争に関する、大きな位置を占めた作品になっていると思えます。グリーンは、アキヒコの『従軍記』を読んではいけないと思いますが、ハルバースタムの作品を評したこのことばを、そのままアキヒコの『従軍記』に与えてもいいところにおかしくないと私は思っています。

日本のジャーナリストというだけではなく、国際社会において、アキヒコの先駆性というのはいかなりのものだと言えます。当時、日本でも本多勝一と関高健が、同じ時期ベトナムに関わり、両方とも戦記を書いていきます。これらと比較してみると、明らかにアキヒコの先駆性というのが浮き彫りになってくる。

簡単にごくポイントだけを押さえて、話しますと、本多勝一さんというのは、たしか京都大学の探検部に所属していた人です。その点では今西錦司さんとか梅棹忠夫さん(前国立民族博物館館長)につながる人です。二人は文化人類学とか民族学、そういった立場の研究をしてこられた人でカラコラム遠征隊などで、調査、フィールド・ワークに力を入れてこられた先生方ですが、本多さんもそれに参加して、カラコラムに行ったり、ヒマラヤに行ったりして、フィールド・ワークを一生懸命やってきた人です。そういう方法論で著した作品に『カナダⅡエスキモー』や『ニューギニア高地人』という初期の作品があります。これは文化人類学、或いは民族学のフィールド・ワークの方法論を使って、丹念に探訪した記録で、私も大変好きな作品です。この『カナダⅡエスキモー』は、エスキモーの人達の家に住み込んで一緒に生活しながら、エスキモーの人達の習慣なり生活なりを丹念に探訪して報告するという、そういうスタイルの文章です。これは文章もすごく素敵で、私も感心して読みました。そういう方法論でやってきた人がベトナムに行くわけです。

『戦場の村』というこの作品も、方法的にいえば、フィールド・ワークの方法で、前の二作品となんら変わりません。そのまま横に移動したという格好になるんですが、ただベトナムというのには戦争をやっているわけで、文化人類学のフィールド・ワークの方法では、それを捉えきれないという問題があったらどうだと思います。ひとつの国が生きているか死ぬか、国が減るかどうかの大変な状況におかれているわけで、そこにベトナム人の生

活はどうだとか、或いはベトナムの高地人の生活がどうだということを見るだけではすまない。戦争をやっている国の将来、民族の生死に関わる問題がある。これはやっぱり民族学のフィールド・ワークの方法では捉えきれない。だから『戦場の村』を読んでも、何となく「ちよっと待ってくださいよ」という感じがある。文章は決して悪くはないんだけど、方法論と状況とのギャップ、アンバランスがあつて、びつたりこないというあたりが、この作品を何となく評価しきれないという問題として残ってくるのだらうと思います。そのことを本多さん自身も気がついていて、自分の今までの方法では戦争を捉えきれないということをや、いやというほど思いつたと思います。それで、見るだけではすまない、探訪するだけではすまないという、そのすまないものところはどうやったら橋を架けることができるかということが問題になってくる。彼が探った方法というのは、ここにイデオロギーを持ってきた。イデオロギーを持つてきて、見るだけではすまないものに橋を架けようとしたというのが本多さんの方法論だと思います。だから『戦場の村』を境にして、非常にイデオロギー的なバイアスのかかった文章を書くようになってくる。そういう発言が目立つてくるということになっていくんです。

本来、彼は『カナダⅡエスキモー』とか、『ニューギニア高地人』を書いていく頃というのは、ほとんどイデオロギーとは関係のない、おそらくあまり関心のなかつた人ではなかつたかと想像します。単純に言えばベトナム戦争を挟んで、彼はイデオロギーを自分の支えに持ち込んできた。本

多勝一のベトナム体験の意味を私はそう見るのです。異論はあるかと思いますが、とにかくイデオロギーを持ち込んだということがひとつ指摘できると思います。

開高健の場合はどうだったか。当時の開高健は、自伝的な作品『蒼い月曜日』の連載を開始したばかりでした。この作品で自分の子供の頃からのこととか、過去の経験を書き始めた。作家がそういうものを書き始めたというのは転機といえます。転機によくそういう方法を取ります。つまり今まで、出発からテーマにしてきたものを書き切つて、どこに行こうかという時期にあたります。目の前にテーマはない。もう一度過去に戻つて自分を見直してみようという反省期、転機にきたということの意味しています。彼はその連載を始めたのに、それを放り出してベトナムに行くんです。ベトナムに行つたら何か新しい、文学的なテーマが見つかるのではなからうかと、期待して行つたと思います。

勇み立つて行つた。ところがそこは戦争をしている。これに衝撃を受けるわけです。一番衝撃を受けたのは公開銃殺なんです。ベトコンの若い少年を引きずつてきて、公開銃殺にする。それを見に行くんです。で、開高健は「吐き気がした」と述懐しています。目の前で、あどけない少年が銃殺されるのを見た時、「これは絶対的な悪だ」と言うんです。ただ自分は安全な、第三者の立場で見ているしかなかったとも言っています。このことが彼にとって非常に重荷になるんです。

もうひとつ、実際に彼は、南ベトナム政府軍とアメリカ軍の掃討作戦に従軍する。彼がついて行

つたのは二〇〇人の部隊で、ペトコングに包囲されて総攻撃をくらい、兵士はちりちりばらばらになって、バタバタと銃弾に当たって倒れて行く。彼も背中にしよつていたバックを全部投げ捨てて、命からがら逃げ帰ってくるという経験をしているんです。二〇〇人いた部隊が、自分達の陣地にたどり着いた時には一七人しかいなかった。「よく生き残ったものだ」と言っています。日本では開高健が行方不明だという記事まで出ていた。

『ペトナム戦記』には、あらゆるものを抜き取られ、放心状態で、まるで焦点が定まらないような目をした彼の写真が一枚挟まっています。「私は何のためにここにいるのかということが、分らなくなつてしまつた」と彼は回想しています。そういう経験を、帰つてからホテルかどこかに閉じこもつて、『ペトナム戦記』として書くのですが、書きながら「全部嘘つばちだ」と、「こんなのは全部嘘だ。嘘だ」という思いが頭の中から消えなかつたという。

何故そういうふうになるのか。文学という方法論では、自分が見たもの、体験したものを、いったん内面化して言葉にして出すという操作がどうしても必要です。じゃ、戦争をどうやって内面化して言葉にするのか。目の前で公開銃殺された少年、この場面を小説の材料として、何をどういふふうに書けるか。これは至難の技だと思ひます。ただ「絶対的な悪だ」と書いてみても、小説の場面にはならないわけで、つまり内面化しきれないものが現実の中にある。厳然としてあるんだということ、開高健という人は悟らざるを得なかつた。

これは二ユー・ジャーナリズムを論じた中でも触れているんですが、トルーマン・カポーティの『冷血』という小説があります。現実起こつた一家四人惨殺事件を、彼が徹底的に取材して小説で書こうとしたけれど書ききれなくて、途中からノンフィクションの方法をとつた。小説でもなければ、ノンフィクションでもないみたい、妙ちくりんな作品で、これを「偉大なる失敗作」といふふうに評価したんですが、つまり現実には、文学の方法をもつては如何ともしがたい、内面化できないものが必ずあるということ。その壁にぶち当たつた時に、ノンフィクションの方法へ転換せざるを得なかつた。カポーティは『冷血』を書いた以降、ほとんど何の作品も書いていません。書けなくなつてしまつた。だから『冷血』を書いたおかげで作家としての生命を縮めたみたい、これはそういうテッド・ロックスに乗り上げた作品だということなんです。

それと同じような意味合いで、フィクションとノンフィクションの壁にぶち当たつたのが、日本では開高健だつただろうと思ひます。

結果的に彼が辿つた道というのは、いろいろペトナム戦争の体験をもとに小説を書いていますが、内面化しきれないということがテーマなんです。「正真正銘のものに向けて私は自分の身を立てたい」と願うんだけれども、立て切れない。どうしても自分は第三者の立場しかとれないんだということ、いやというほど、再三繰り返して繰り返して書いていく。最後の方になつてきて、戦場の砲弾の音を遠くに聞きながら、釣りに興じている人間を書いたものがある。恐らくこれは開高健の

実体験だろうと思ひます。釣りキチの華僑の人の所に行つて、「俺を釣りに連れて行つてくれ」とたのむんですが、その華僑の人に気に入られていっしょに釣りに行く。離れ島の近くの船上で、遠くの方から砲弾の音が聞こえて、そこで二人して釣りに興じているという作品です。ここでこの人はペトナムの問題から逃げようと、離れようと思つたんだらうなと思ひます。

次の作品を読むと、「もう二度とこの国に戻ることはないだろう」と書いてある。この人は、ここで作家としてのひとつの締めくくりをしたのだと思ふんです。以降彼は遊興の人、釣りキチの人として晩年を送つていくわけでしょう。そのくらい彼にとつてもペトナム戦争というのは大きな経験だつただろうと思ふんです。結局、正真正銘のものに向き合えないまま、彼は作家としての生命を終えたというか、これはトルーマン・カポーティとよく似たひとつの辿り方だろうと思ひます。つまり見るだけではすまないもの、決して内面化しきれないものが、最後の大きな壁だつたということなんです。

じゃあ、我がアキヒコはどうしたか。アキヒコはこの二人がぶち当たつた壁というものを突き抜けて、向こう側に渡つた人なんです。分りやすく言つと、「いとち男々」といふとおかしいですが、渡つた人なんです。渡れた人なんです。なんで渡れたのか。そこが私は一番の謎だと思ふんです。アキヒコの大きな謎であつて、いろんな説明の仕方ができると思ひます。昭和ひと桁生まれの人というの、こういう精神構造を持つという、そういう言い方も、一面あるかと思ひます。昭和ひ

と桁世代の人というのは、特攻隊で命を落とす、死ぬことが決まっていたような人達でしょう。いざその年齢になってみたら、もう戦争が終わっていた。だからある特定のメンタリティーを持った世代だということに言えないこともない。

或いはまた、アキヒコの幼少時期の戦争体験とか、被災者としての体験、或いはお父さんが軍人であつて、ベトナムに多少縁があつたとか、いろんな生い立ちの問題もあるかと思ひます。そういう説明の仕方してもやっぱり、開高健や本多勝一がどうしても渡りきれなかつた、この壁を突き抜けて向こう側に行くことができたことの説明としては、納得できないものがある。掴み切れないものが、どうしても私の中には残るのです。

謎があるから非常に魅力がある。謎のない人間というのは、たいして魅力もありませんよね。だから謎は謎として残したまま、取り敢えずそういうことを可能にするのにアキヒコを助けてくれた要素、十分条件ではないが、必要条件というものがあつたのだらうと考へてみます。

そのひとつは、これはアキヒコも書いています。日本の新聞社とか雑誌社とか、そういう「日本のジャーナリズムに、私は一度も身を置いたことがないことが幸ひした」ということだと思ひます。それでアキヒコは「欧米の記者連、ジャーナリストが私の兄貴であり、師であつた」と、これが私にとつては非常に幸運であつた」といふ言い方をしています。彼がもし、日本の新聞社かどこかに一度でも席を置いていたら、そういうジャーナリストであつたならば、壁の向こう側に渡ることが可能であつたとは思へないんです。

私も新聞社にちよつと席を置いていたことがありますが、とてもアキヒコのようにはなれなかつただらうということが、それなりに分ります。日本のジャーナリズムとアメリカのジャーナリズム、或いはヨーロッパのジャーナリズムとは、決定的な違いがある。これはものすごく大きな違いです。これは歴史的な生い立ちの問題ですね。

誰でもが言うことで改めて解説するほどのことでもないのですが、話の展開上必要なので、お話ししておきますと、ヨーロッパでは、一九世紀ころ、専制政治を終わらせて議會を成立させます。市民革命が起こつている最中、いかに統治するものが自分の権力を正当化できるか。その論理的根拠は何かということが問題になります。

その時に考へられたのが、統治する手続きを明解に示すということ。いまの言葉でいへば情報公開。その透明度が高ければ高いほど、その権力は自らを正当化できる。それを新聞を通じて公開しようという形になるんです。国民の側は、自分が統治されることを納得するためには、統治される手続きを明解にしてくれと要求できる。そういう要求できる権利を持つ。つまり知る権利です。その知る権利を個々の国民が、権力に直接要求するといふのも物理的に不可能だから、その権利を新聞に付託しようという考へ方なんです。

そうすると、統治する者と統治される者と新聞という三角関係が成り立ちます。この三角関係をドイツのハーバマスという哲学者は公共圏と言つた。この公共圏がブルジョア革命、市民革命を経て成立するわけです。

そういうことから言うと新聞、ジャーナリズム

というのは民主主義の原理の中に組み込まれたシステムのひとつになる。権力の側はジャーナリズムの自立性、報道の自由を犯してはならない。ジャーナリズムは決定的に自由でなければならぬ。これを犯すようなことがあつたら、権力自体も腐敗していつてしまふということを、お互いに了解している構造なんです。

この考へは、アメリカにも渡る。アメリカにいくと、もつと単純明解になつて分りやすくなる。アキヒコの『従軍記』を読んで非常に面白い点の一つは、ジャーナリズムと権力の関係が、明解にみごとに描かれているところ。例えば彼は弾圧に抗議する仏教徒を取材していて、秘密警察に逮捕されます。連行されて「おまえはちよつと賢が悪いから、別の本部に送る」というので、建物からつれ出されてくるところを、アメリカのジャーナリスト十数人が取り囲んで、岡村昭彦の身柄を奪い取つて、車に乗つて連れ去つていくという場面があります。連れ去つたアメリカのジャーナリストが「冗談じゃない。こんなことで逮捕されてたまるか。われわれはジャーナリストなんだ」と、そういう言い方をします。日本のジャーナリストで「われわれはジャーナリストなんだ」と胸を張れる人っていない。日本の新聞記者は絶対にそんな言葉吐けません。ここのとこが違ふんです。

日本では先ほど言つた公共圏というのが成立していない。日本は市民革命を経していない。ブルジョア革命を経していない。新聞に対してそれだけの権限を与えていない。国民の知る権利を新聞に付託するという考へ方がまつたくない。だから、新

聞記者も「われわれはジャーナリストだ」と胸を張るわけにいかない、というところがあるんです。

挙げれば切りのないほどエピソードがあります。『LIFE』に彼の撮った写真が載る。中にベトナム政府軍が、ベトナムを掃蕩している写真がありますよ。これが発行される前に、恐らくベトナム政府の方に伝わっていたんだらうと思います。ベトナム政府の報道官が、アキヒコのところに来て、即時販売を中止するように言えと命令する。すぐにアメリカの報道官のところに行つて、国防省に電話をして、国防省に販売中止の命令を出すように言えと。それができなければお前は国外追放だ、という言われ方をする。彼があわててアメリカの報道官のところにとんで行つて、その話をしたら、「何を血迷ったことを言っているのか。きみの所属しているパナ通信がきみの写真をどういうところに売ろうと、それは正当な商行為であつて、われわれにはそれを差し止める権限はどこにもない。安心しろ。お前を絶対に国外追放なんかにはさせない」と明言してくれる。

これはジャーナリストの自由を犯してはならないという考えが徹底して浸透しているということだと思います。アメリカの社会はこのところが凄いと私は思います。そういう考え方があるから、こういう発言が出てくるんです。結局、『LIFE』はそのまま発行されて、一躍彼は、著名人になつていくわけですけど、もしあそこで日本の雑誌だったら、簡単に発行停止になつて、アキヒコの写真はこの世に出なかつたらうと想像できます。

それからもうひとつ、これも感動的なエピソードですけれども、ベトナムの農民兵が連行されて

来て、それをベトナムの政府軍の兵士が、今まさに銃を向けて、射殺しようとする。その側にいたアキヒコがカメラを持って飛び出し、農民の後ろに立つて、「さあ、撃つなら撃て、おれが写真を撮つて世界に報道してやる」と啖呵を切るんです。その銃を向けた兵士は「すまん。すまん。僕はなにも殺す気はなかつた」と謝つた。恐らくこの農民兵はその後、どこかでやっぱり銃殺になつているだらうと思いますが、とにかくアキヒコはそれをカメラで、その場は阻止した。

かなりヒロイックな話ではありますが、こういう行動がとれるというのは、やっぱり後ろに国民がいるんだ、世界の人達がおれの報道を待っているんだと思えるからでしょう。国民は我々を支持してくれるんだという確信がないと、ジャーナリストとしてはこういう強い姿勢はとれないと思います。そういう後ろに担保がないとできない。つくづくそう思います。

だからアメリカのジャーナリスト達が兄貴であつたという言い方はよく分ります。そういうところで仕事ができただ岡村さんというのは非常に羨ましいと思います。

もうひとつ、アキヒコの写真で有名な、自分の息子が殺されて、遺体ももう既にゴミに包まれていたのを抱えている兵士の写真があります。「ぼくの息子が死んだ。どうか息子の写真を撮つてやってくれ」と、アキヒコのところへ兵士がやって来た。「自分の個人的な悲しみを、民族の悲しみとして伝えてほしい」という、こういう意識というものを、ベトナムの人達は八〇年間のフランスの植民地時代を経て、そういう意識を身に付けて

いるんだとアキヒコが書いています。

日本の国民にはこれはない。だから日本のジャーナリストは、ちゃんと強くなれないんだという言い方をしています。確かにそうです。私も首にカメラを下げてよく人の死んだ現場に行きましたけど、カメラをひったくられて、散々小突き回された経験は何度も経験しています。何とも情けない話なんです。「何で人の不幸を覗きにくるんだ」という発想でしょう。

そうじゃなくつて「あなた達は被害を受けた被害者なのだから、その怒りを、我々にぶつけるのではなくて、あなた方がそれをわれわれに話してくれば、われわれはそれを報道して、日本の国民に訴えてあげるから」と言つても聞き入れてもらえない。「訴えてあげるから」というのはおこがましいですが、「報道するんだから声を出してくれ」と言うのだけれど、その声を聞きにくくと袋叩きにあうという、そういう状況がある。

だからアキヒコが経験したベトナムの戦場の経験と、われわれが日本で経験する新聞記者の置かれた立場というのは、天地の違いくらい開きがある。本当に羨ましいと思います。日本のジャーナリズムの中で育つた経験がない、仕事をしたことがない。アメリカのジャーナリストが自分の兄貴であつた、教師であつたという言い方。それはアキヒコが成立する大きなポイントのひとつなのではないかと思えます。

もうひとつは、世界史という観点です。この世界史という観点は非常に大きい要素です。つまり日本人という立場でベトナムに行つたら、どうしたって、開高健がぶつかったような第三者の立場

しかとれない。日本人の立場を、どうやって脱皮していくか、枠をはずせるかということになると、どうしても歴史観が必要になってくる。日本というものを相対化する、その視点がないとそうはならないはず。だから世界史という視点で、日本を相対化し、自分を相対化し、日本人という枠をはずして戦争に直接向き合った時に、初めて高健が言う、真正正統のものに立ち向って、自分の身を立てるということが可能になるんだということだろうと思うんです。

これは堀田善衛さんの言う、「いかなる偏見もない」という言い方。(これは善尾淳さんがお書きになった『岡村昭彦選集』の解題の中から拾った言葉ですが)「岡村昭彦にはいかなる偏見もない」と堀田さんは言っています。いかなる偏見もないというのは、本多勝一さんのようなイデオロギー的な観点でものを見ていないということ。自分の言葉で戦争を語り、自分の考えたこと、自分の見たことを戦争の真つ直中にいて、自分のことばで語っている。だからそこにイデオロギーが入ってくる要素はない。全部自分の言葉で語っているということだと思っんです。

これも解題の中から拾った言葉ですが、荒瀬豊さんが「実存史観」という言い方をしています。「実存史観」という言葉は、私も大変気に入った言葉なんです。これは「歴史を知ることとは自分が生きることである。自分が生きることは歴史を知ることである」ということだろうと思います。だから生きることにいっては、自分の位置とか、世界の歴史を知っていなければいけない。そうでなければ、自分がよく生きることはできない。

生きようとするれば必ずから世界史の中で、いまだういう時代にいるのか、ということをも自分で認識しなければならぬ。まして人がバタバタと死んでいくような戦争を目の前にして、これをどう受け止めたらいいのかが、いちばんむずかしい。

まずこれを世界史の中に置いて考える。文学の方法で内面化するだけではとても捉えきれない。これを世界史の方へ返して行って、その中にいっど置いてみて、それからもういちど自分の方に引っ張り戻してくるという操作が必要であろうということなんです。

だからそういう意味で「実存史観」だといっていい。簡単にいえば、自分で生きるために歴史を知ること、歴史を知ることによって生きるという、そういう方法論だと思いますが、こういう考え方というのは、アキヒコはいつどこでというのは分らないが、ベトナムに行くかなり前から、既にそういう歴史観というのが強靱にあったというふうに、書いたものを読むと思える。

そういう歴史観がアキヒコという方法論を成立させるために重要なファクターになっていただろうと、私は思っています。

この「実存史観」に関連していえば、一番初めに話をしましたハルバースタムの方法論も、まさにこのアキヒコと同じ方法論を持っていたと言えらると思えます。ハルバースタムはアメリカ人でありながら、アメリカ人の枠をはみ出て、戦争と直に向き合ったジャーナリストだといえれば解りやすいでしょう。つまりアメリカというのは戦争の当事国ですから、当然「勝った負けた、アメリカ軍はどうなっているのか、有利なのか不利なのか」

という観点がどうしても潜在的にあります。

ところがハルバースタムというのは、そういうアメリカ人である以前に、「私は一個の人間だった」と言っています。「ジャーナリストである前に一個の人間だった」という言い方もしています。アメリカ人という枠を離れて、ベトナム戦争と直に向き合う。だからこそベトナム戦争の本質が見えてくる。彼はこの戦争を植民地主義と民族主義の戦いなんだと言っています。アメリカのハワイトハウスがいうように、共産主義と自由主義の戦いではないんだ。植民地主義対民族主義、民族自決の勢力との戦争なんだというふうな捉え方をしている。そういう視点が生まれたのは、彼がアメリカ人という枠を離れて、一個の人間として戦争に立ち向かっていったジャーナリストだったからでしょう。だからこそ成り立ちうる観点ということだろうと思えます。

『言語としてのニュー・ジャーナリズム』の中で、ハルバースタムというのはジャーナリズムの中に存在論的、認識論的課題を持ち込んだジャーナリストだ、というふうな規定の仕方をしました。存在論的というのは要するに生きることで、認識論的というのは、先ほども言いましたように知ること、認識すること。だから生きることは知ることであり、知ることとは生きることだとい言ひ方になります。従来の近代ジャーナリズムは、客観報道という考え方で、これを全部切り捨ててきたわけです。

従来の言い方をしますと、客観的に、主観を交えないで報道しろという言い方になります。これがいかに欺瞞的なことかということが、最近よう

やく私も解りましたけど、その客観報道では戦争の本質は語れない。報道できない。だから、ハルバースタムは、生きることとは知ることであり、知ることとは生きることだという、そういう考え方は、信念に忠実に従ってベトナム戦争を報道しつづけた。このことによって彼は六四年度のピューリッツ賞を受賞するわけです。

ところがそれをやられると、ベトナム政府軍もアメリカのケネディ、ジョンソン大統領も非常に困るわけです。それでニューヨーク・タイムズの本社に「ハルバースタムを早く、本社に帰せ。あんなのがいたら、じゃまっけでしょうがない」と圧力をかけてきた。ベトナム政府の高官も「ハルバースタムをバーベキューにして食ってやりた」と、敵意をむき出しにしていた。

にもかかわらずニューヨーク・タイムズは敢然とその圧力をはねのけ、ハルバースタムも同じ姿勢を貫いて報道を続けた。後に、ベトナム戦争に負けたのはベトナムに負けたのではなく、ジャーナリズムに負けたんだという言い方をされますけれど、まさにそういうような要素があった。このハルバースタムのような報道の仕方が、アメリカの報道を大きく変えていった。いわゆるニュー・ジャーナリズムです。ハルバースタムはこのニュー・ジャーナリズムの最も代表的な、源流部分に位置するジャーナリストです。

そのジャーナリストと岡村昭彦の作品というのが非常によく似ている。実存史観というのとジャーナリズムに存在論的、認識論的課題を持ち込んだというハルバースタムの方法。これは同じことを別の言葉で言っているにすぎないでしょう。二

人は非常によく似た立場に立っている。恐らく戦争というのは、そういうふうに見られることを欲していた。本当のことを見ようとしていくと、どうしてもそういう方法論になつていかざるを得なかったということなのではないかと考えられます。

そういう意味で、このニュー・ジャーナリズムを契機にアメリカのジャーナリズムは大きく変わっていき、世界で最も強靱なジャーナリズムといわれるようになる。そういうジャーナリズムを作り出していったのは、三〇年前のニュー・ジャーナリズムの動きです。

ニュー・ジャーナリズムという、先ほど言った『冷血』ような方法論を持った、ノンフィクションでもない、小説でもないみたいな、そういうのを指していると考えられていますけれど、そういうものを生み出す背景というのは、従来のジャーナリズムを批判して、徹底的に新しい報道のスタイルを探っていったハルバースタムのような、こういう人達の方法論を考えないと成り立たない。

アキヒコも日本のジャーナリズムをさんざん批判してきたわけです。アメリカのジャーナリズムでハルバースタムという、これはビッグ・ネームで、若い記者達からは神様のように思われている人です。ところが日本のアキヒコ、同じ位置にいるジャーナリストであっても、日本のアキヒコについては、いまの若い人達は、あまり知らない。われわれの年代では知っていますよが忘れかけている、そういう存在になってきている。「これはちょっと困った問題だな」と私は感じます。

アメリカと同じように、日本のジャーナリズムがアキヒコの批判を受け入れて、或いは日本のジャーナリストがアキヒコの後を追って、ジャーナリズムを変えてく努力をしていたならば、いまさら、私なんかがジャーナリズム批判をやらなくても済んでいたはずなんです。ところが、この三〇年、全く変わっていないわけで、これは何とかしなくてはならない。そういう意味でもアキヒコをおおいに見直して、ビッグ・ネームにしていかなければいけません。

ひとつだけ付け加えておきますと、『言語としてのニュー・ジャーナリズム』の中で、「ハルバースタムの系譜に属する日本のジャーナリストはひとりもない」というふうに、私は断言しているんですが、これは明らかにまちがった認識です。当時、私はアキヒコを報道写真家というジャンルに入れていて、頭の中になかったもので、そういう書き方をしました。これは訂正しなくてはならない。喜んで訂正させてもらいます。それだけ付け加えて終りにさせていただきます。

たまきあきら（フリージャーナリスト）
一九四〇年、新潟県生まれ。早稲田大学文学部卒業。「新潟日報」記者を経てフリーに。現在は社会時評、メディア論を週刊誌、月刊誌に執筆。「エコノミスト」（毎日新聞社）にコラム「異議あり！」を連載中。著書に「思想としての風俗」（共著、大和書房）、「言語としてのニュー・ジャーナリズム」（学藝書林）、「ニュー・ジャーナリズム」（洋泉社）など。

事務局便り

1、第十二回目のAKIHIKO忌から二月、漸く記録集ができあがりしました。今回のテーマは、岡村昭彦再評価への視点としての「六十年代ジャーナリズム」論。お二人の講演もさることながら論文として読み直しても、実にすばらしい内容です。AKIHIKO忌へ参加できなかった方もきつと喜んでいただけたらと思います。大住敏子さんにはテープ起こしを、玉木さんと吉田さんには加筆訂正を有り難うございました。

2、札幌テレビの「どきどきワイド212」で、四月九日、函館ゆかりの岡村昭彦の紹介ということで「AKIHIKO忌」当日の様々と、佐藤純子さんの談話を含めて七分程度、放映されました。一応ご報告しておきます。

3、講談社の「日録20世紀」一九六四年版（2/25発行）に、「決定的瞬間」「LIFE」が特集！ 岡村昭彦が切りとったベトナム戦争の断面」というタイトルで、拷問される農民の写真が、見開き頁で二枚使用されています。

4、「AKIHIKOの会」の活動の一つとして、毎月一回「AKIHIKOを読む会」を開催しています（上記の囲みが「最近の主題の一覧表」）
毎年夏には、夏期セミナーと称して、ふだんの勉強会とはひと味違ったセミナーを開催してきました。昨年は、「原銀銀座、の夏をゆく」というテーマで大飯原発と滋賀里病院の見学をしました。今年も、会員の岩城桂子さんの軽井沢の別荘をお借りして、八月九日から十日にかけて（都合のつく人は十一日まで）、玉木明氏の「いま、新聞報道はどうなっているのか」、米沢慧氏の「AKIHIKOが教えた資本主義発達史」など、じっくり勉強しながら、温泉や散策も楽しみました。ふだんも歓迎します。参加ご希望の方は、早めに事務局までご連絡ください。詳細は追ってご連絡します。

5、AKIHIKOの会の活動は、年一回の「AKIHIKO忌」と会報の発行で、会費、会則、会長なしで、通信費一〇〇〇円（不定期）のみです。会員として登録していただいた方二四〇名に「AKIHIKO忌」の案内や会報をお送りしています。次回あたり通信費を再度お願いすることがあるかもしれませんが、その節は宜しくお願ひします。

6、通信費その他の送金は郵便振替をご利用ください。口座番号「〇〇一七〇一六一五二二三」加入者名「岡村昭彦の会」です。

●「岡村昭彦を読む会」最近の主題（1995年1月～1997年05月）報告

★1995年テーマ——（遠い戦争見えない戦争）

- 第10回（1月）'90年代の戦争—むのたけじ・岡村昭彦『1968年』にふれて
- 第11回（2月）「自然・都市・民衆」—阪神大震災にふれて
- ※（3月）第10回AKIHIKO忌
- 第12回（4月）『シャッター以前』の合評会
- 第13回（5月）サリン事件、オウム真理教にふれて
- 第14回（6月）震災とボランティア/松澤和正『報道写真家岡村昭彦』を読む
- 第15回（7月）「マインドコントロール」「サブリミナル」
- 第16回（8月）夏期セミナー「安曇病院見学」—医療ボランティア、その後
- 第17回（9月）ボランティアの資質と思想(岡村昭彦の医療ボランティア)
- 第18回（10月）ボランティアの資質と思想(岡村昭彦の医療ボランティア)
- 第19回（11月）ボランティアの資質と思想(いじめの時代と宮沢賢治の精神)
- 第20回（12月）1995年総括—見えない戦争。岡村昭彦の現在をめぐって

★1996年テーマ——（やさしさのトライアングル）

- 第21回（1月）「やさしさの病理」/吉田敏浩『森の回廊』を読む
- 第22回（2月）ホームレスへの視点（新宿西口段ボールハウス撤去にふれて）
- ※（3月）第11回AKIHIKO忌
- 第23回（4月）「入院あんない」の思想—看護の夢・医療現場の可能性
- 第24回（5月）離陸する宇宙都市—ヒトがいま宇宙人になる！
- 第25回（6月）「患者よがんと闘うな」という視点
- 第26回（7月）「微笑」にみる戦後女性誌論—玉木明
- ※（8月）夏期セミナー「若狭—満文庫・大飯原発」行き
- 第27回（9月）事件としての住居'96「餓死日記或いは死に記録する生き方」
- 第28回（10月）「往きのいのち、還りの生命」そして医療の現在
- 第29回（11月）「往きの家族、還りの家族」
- 第30回（12月）AKIHIKO'96 “援助交際”

★1997年テーマ—AKIHIKOを探せ（われわれはどんな時代にきているのか）

- 第31回（1月）消費社会の安全とは何か（平成版「国民白書」を読む）
- 第32回（2月）テレビ芸としての猿岩石（テレビ芸の現在）
- ※（3月）第12回AKIHIKO忌
- 第33回（4月）ホーム。住居はどこに向かっているのか（ホスピスの位相）
- 第34回（5月）「脳死の人=還りのいのち」はどこへ向かうのか（脳死移植）

※「AKIHIKOを読む会」（主宰者米沢慧）は毎月原則として第二土曜日午後1時から開催（倫理研究所8F会議室）、4年目に入りました。会員数は現在58人。出席は毎回10人前後。全員には毎月「AKIHIKO通信」を送っています。

「岡村昭彦の会」会報 六号

発行 東京都江戸川区西小岩五十一一二十七

〒田代勇方「岡村昭彦の会」事務局

TEL & FAX 〇三三六五七七八〇